

DPC時代に向けた培養検査実施基準に関する考察

膣分泌物材料の場合

岩崎 瑞穂, 小松 方, 長坂 陽子, 福田 砂織, 阿部 教行, 島川 宏一
(天理よろづ相談所病院)

医療包括化の波は、試験的に行われた国立病院の範囲から特定機能病院へと及んでいる。今後DPCは更に進むことが予測されるが、それに伴い臨床検査も一つの岐路に立たされることが予測される。特に検査の効率化と低コスト化は、検査を見直す中で最も重要な課題である。今回、産婦人科外来より提出された膣分泌物について調査し、検査の実状とこれからの検査法について考察してみた。

【対象及び方法】2004年1月から5月に帯下異常等の症状により産婦人科外来に受診した患者から採取した膣分泌物362症例375検体(11~82才、平均37才)を対象として、膣分泌物のNugentスコア(以下スコア)と検査目的、培養成績、治療の有無を調査した。治療の有無に関しては、薬歴モニターで受診日あるいは次回受診日に抗生剤の投与があったかどうかを調べた。尚、入院中の患者で他科受診上で材料は原疾患への抗生剤投与等があるため、集計から除外した。

【結果及び考察】材料をスコア別に集計すると、正常カテゴリーの0~3に分類されたものは375件中201件(53.6%)

そのうち内服あるいは外用の薬剤治療がされていたもの(治療有)は28件(7.5%)、中間の4~6に分類されたものは98件(25.8%)で治療有は28件(6.9%)、細菌性膣症とされる7~10は67件(17.9%)で治療有は29件(7.7%)であった。治療群はスコアに差はなく、検出菌、主に真菌やGBSに対する治療が行われていた。未治療群の内243件(64.8%)が正常~中間域のカテゴリーに分類され、正常~中間スコア材料における培養の必要性を再検討する必要があると思われる。検査目的を感染疑い、真菌感染疑い、感染症否定、治療効果判定、菌叢把握、スクリーニングの6つに分類してスコアとの関連をみたが、目的とスコアの間には特に傾向はなかった。膣症の細菌培養では材料をスコアで分類し、菌叢の判断ができると思われるが、真菌やGBSを疑う場合には培養が必要であり、臨床側からの情報が必要であることが伺え、臨床医との連携を密にし、検査の目的、ターゲットの菌を明確にすることで検査の効率化が図れるものと思われる。

連絡先 0743-63-5611(内線 8665)